

序

先き頃の戦争で父を失った遺児の数は、日本全国で百万人にも上るといふことです。その人々の日々の寂しさと労苦とは、推察に堪えませんが、殊に敗戦のため、心の張りや失った一部の国民が否定的、自棄的となり、どうかすると国民が国の為めに尽し、その為に犠牲となることの貴とさを忘れる嫌いがあることは、遺児の人々の心事を思い、まことに忍びないことです。戦争を厭い、平和を願う心は、われ人ともに変わりませんが、国の為に、同胞の為に、身を捨てて尽した人々のことは、国民として忘れてはならぬと思ひます。

神奈川県遺族連合会長佐藤信氏から、遺児諸君のことをきき、その人々が日本の為に、平和な、よりよき明日を開くことに励み、働くについても、国民が国に尽すというところが、どんな大切な、貴いことであるかを、知ってもらいたいと思ひました。それでその人々に読んでもらうため、平生考えていることを書いたのがこの一文です。

前言

戦死者の遺児である皆さんに対し、私も遺族の一人としてお話ししたいと思います。私事になりませんが、私の仲は慶応義塾を出て、或る銀行に奉職していましたが、志願して海軍の主計士官となり、昭和十七年の十月、南太平洋方面の海上戦斗で戦死しました。年は二十五でした。若し彼れが今少し年

長であつたか、または早く結婚してしまつたら、子供を跡にのこしたかも知れず、そうすれば私も、遺族の祖父としてその世話をしなければならなかつたのかも知れません。皆さんは父を失ひ、私は子を失つたという違いはありますけれども、戦争で肉親を失つた痛みは、多分変わるまいと思ひます。死んだ児の年を数えたいといふことは未練なこととされて居り、私自身愚痴ボイ語は大きらいですが、事実ために、生きていれば幾つだろうと思うことはあり、従つて、皆さんが亡きお父さんのことを思われる心情は、私に分るように思つ

遺児の皆さんへ

ています。皆さんのお父さんは、国難に際し、国の為めに死なれました。この、国民が国の為めに死ぬといふことの意味を、少し皆さんと一緒に考えて見たいと思ひます。

日本人の日本

吾々の住むこの世界は、多くの国に分れています。国々には国境があり、国境の内に住む人民は国民と呼ばれ、一の政府をいたゞき多くの場合、一の國語を話し、風俗習慣を同じくし、共同の歴史を背後に持ち、譬えば、同じ船に乗る組んだものが、一緒に波や風を

しのいで来たように、長い間、苦楽安危を共にして今日に至つたものであります。大きな森の一つ一つの樹を觀れば、若木もあり、老樹もあり、芽生えてこれから育つものも、朽ちて倒れるものもあつて、様々ですが、その個々の樹に拘らず、森そのものは何時もそこに在つて変わらません。それと同じように、國民といふものも、それをなす一人一人の個人を見れば、老人もあり、少年小児もあり、老人が老いてやがて枯れ死ぬ傍らに、続々新しい子供は生れ、成長して、少年は青年、青年は壯年となり、一人一人の生き死には別

小泉信三

に、一の國民といふものは、永く変らぬ生命を持つて居るので、そうして吾々も皆さんも、共に吾が日本國民に、たゞに不朽の生命を持たせるだけでなく、益々強い、健全な生命をそれに吹き込みたいと切に願つて居る次第です。

この点について、吾々日本國民は一の幸福に恵まれて居るといえます。それは、この日本の島々には日本人だけが住んで居るといふことです。これは一見ごく当り前のことのようにですが、広い世界を見れば、言語も皮膚の色も違ふ幾つかの種が寄り合つて、一の國をなし、互いの間の利害も感情も

同じでない為め、一つの國民が完全な一体を成して居ない例は、沢山あります。ロシアやインドやシナはそれだといえましよう。またイタリヤ東北境のトリエステ、仏獨の境のザアル、ドイツとポーランドとの間のダンチヒ等では、異つた民族が相接し、相混じて住む為に磨擦や衝突が起り、現に第二次大戦が、ダンチヒ問題が導火となつて起つたことは、皆さんも御承知のことであらうと思ひます。それを考えると、四方海に囲まれてゐる為に、隣國と境を接する面倒がなく、また國の内には異民族といふものがなくて、日本人が日本人とのみ共に住み得るといふことがいかに大きい幸いであるかが分ると思ひます。勿論、日本の島々の上には八千数百万人の同胞が住むことは、随分窮屈で、決して楽ではありませんけれども、しかし、この日本の国土は、日本人のものであり、日本人のみのものであるといふことは、吾々にとって真に張り合ひのあることであります。吾々はこの國土を祖先から受け継いで、これを子孫に伝えるのであります。これを、その吾々にこの國土を伝えるものも、吾々からそれを受け継ぐものも、共に皆な同じ日本語を語り、同じ心で國旗を仰ぐ日本人であるのは、仕合せなことではありませんか。

(本稿は神奈川県遺族会より発行の冊子を転載しました。同会会長佐藤信殿が本会の構成・目的・活動の趣旨に感動されました全文の転載を御了承下さいましたことを申し添えます。つぎは六号、七号に掲載の予定であります。)

昭和四十二年度慰靈祭の御案内

一、日時・場所
昭和四十二年二月六日午前十時
靖國神社参集所に集合

二、行事
昇殿参拜
定期總會
講演ギルバート諸島の戦斗概要
第六根拠地隊参謀 林 幸市殿

三、その他
ギルバート諸島方面の會員の増加に伴い、この慰靈祭に参加員数の予想がつきません。準備の都合もありますので御手数ですが、参列希望の方は御氏名(同行の方の御氏名も)を本部あてお知らせ願ひます。本部の事務処理が助かりますので、戦死者の御氏名・島名或は部隊名附記下さるようお願いいたします。

次に九段會館に宿泊御希望の方のため、三十名分の宿泊の予約をいたしました。御希望の方は宿泊者の氏名、男女別宿泊月日戦死者の御氏名と戦死の島名をなるべく、早くおしらせ下さい。なおそのとき一人一泊(二食付)千円の割で御送金下さいませ。昨年はお知らせなく取消された方があつたため、貴重な会費金を無駄に支出しました。幹事の不行届は深くお詫びいたしますが、本年は前納に御協力下さいませ。よろしくお願いいたします。

クエゼリン環礁警備日誌 (3)

文学博士
元海軍少将

有馬成甫

昭和十八年

六月十六日(水)晴、戸島少将
掌電信長・技研出張技手(電探)

をルオット島に派遣す。その地の
電探の能率を向上せしむる為め

である。午前砲術参謀及び北村陸軍
少佐と共に南砲台地区及び新兵舎

予定位置を巡視す。この結果八種
砲第三砲台(増設)の位置を決定

した。

昨十五日附で、第六十六警備隊
が新たに増設せられミレ島に置

かれた。司令は海軍大佐志賀正成
氏である。

これによって南方地区防備計画
の一部を変更した。夕食を士官室

にて准士官以上一同と共に懇談
を行った。

六月十七日(木)晴、午前三時
三十分北方新道路を視察し、第三

砲台敷地を見る。午前六時各砲台
長、北村陸軍少佐等を集め会議を

行う。付属弾薬庫の位置、耐弾所
施設の数、位置、種類等に関する

ことを決定す。

余が以前艦長(仮装砲艦)をし
ていた福山丸船長(運送船)より

昼食の招待を受け出席、乗組士官
と共に歓談し、終つて船員に対し

一場の訓示を述べ、

第十八御影丸及び駆逐艦夕月入
港、元橋大佐に会う。

築城関係の者を集め、夕食を共
にす。

六月十八日(金)晴、月出午後

四時六分、月没午前三時十分、第
六艦隊司令官来駐あるやも知れ
ずとの報を受け、その場合のため

に午前三時三十分宿舎を予定し敷
地を巡視す。

十三ミリ機銃の使用方針を定む
潜水艦基地にて昼食し、食糧自

給の方針に基き漁撈計画の立案を
命ず。夕月駆逐艦長を夕食に招く

今夜は満月、共に月を賞す。月光
昼の如し。

午後七時二十五分頃、参謀より
電話・ミレ・タラワ・大島島・ヤ

ルトに敵機来襲せりと。午後七
時三十五分空襲警報第一配置に就

く。暫らくして警報解除。各砲台
を見廻り終つて午後十一時就寝す

(軍装のまま)

六月十九日(土)雨、根拠地隊
司令部に行き暮後に会い昨夜の空

襲情報聞き、総合するに敵機の
来襲せるは(一)タラワ(二)ナウル(三)ミ

レ(四)ヤルトの四箇所に投弾せ
るはタラワのみ。ヤルトにては

吊光弾を十個落して去る。多分フ
ナフチ基地より来襲せるものかと

思はる。いづれも一〇〇〇哩圏内
にて偵察の為ならんか。

建築部を訪うて第六艦隊司令部
の進駐し来る場合の準備につき打

合せをなす。

午後各砲台長を集合し、会議を
開き昨夜の空襲につき学ぶべき点

を総合し、直に実行せんことを研
究す。

六月二十日(日)午前三時三
十分兵員にて構築中の戦車壕を見
る。午前六時汽艇にて棧橋を築し

クエゼリン環礁内湖の入口(キー
ヨ水道)監視所のあるキーヨ島に

午前七時三十分着。浪ありて大発
着陸出来ず、伝馬船さえて着陸困難

なる故、皆海中に飛び込み上陸す
ることが出来た。監視員五名あり

この方面在住土人の酋長風波のた
め、風待ち滞在中なるに逢ふ。先

日來りしが、浪ありて帰ることが
出来ず、滞在中(監視所に)なる

由。雑用をなして監視員に協力す
るといふ。島内の生活幽棲の趣き

あり。

今朝午前六時四十五分ナウル島
にB24が一機来襲せりととの報あ

り。福山丸午後二時出港、トラッ
クに向う。

夕刻阿部司令官タラワ出張より
帰部。司令部を訪い司令官に会い

情報聞く。

六月二十一日(月)曇、時々ス
コールあり。午前三時三十分陣地

構築作業を見る。

午後豚及び鶏の飼育状況を巡視
す。未だ素人的にて大々的に改良

の余地ありと認む。ナウル島の南
拓職員来る。予備士官もあり、夕

食後司令部に行く。ソロモン方面
の敵、攻撃に出づる公算大なる旨

の電報あり。砲台、電探、見張に第
二警戒配備に就くよう命令を發す

ヤルト港口に敵潜水艦出現の
報あり。

六月二十二日(火)晴、早暁よ
り鶏舎の改造、豚小屋の新築縄張

りをなす。

(註) 鶏肉は病人用に、豚肉は
兵員に供せんため大々に増産

せんと欲し、各兵員宿舎に分担
して飼育せしむることとした。

(之に関する命令参照)

司令官イメージジ(ヤルトの地
名)巡視。ナウル島引揚南拓参事

村原彪一(中佐)氏及会社職員三
人大作氏来訪、午後教育局々員人

見大佐来訪、島内を案内一巡す。
夜夕食に司令部より招かる。

本日各見張を連絡巡視していた
雷神丸帰りに棧橋に横つた。海老二

百許り、カツヲその他の魚、二百尾
を生かしたまま持ち帰る。先に製

作を命じ置きたるいけす(生簀)
の一部を入れて生かし、大部分を

主計長に渡し兵員の食卓を賑はし
む。右の外豚、鶏多数を持帰りし

につき鶏舎、豚舎に入れ飼育せし
む。但しこれら生物の運搬法には

改良を要するものあり。

六月二十三日(水)曇、時々雨
朝、潜水艦基地の豚舎を見廻り、

その移転改造を命ず。本部附属豚
舎の縄張りを行う。

南拓会社員より北方道路工事に
協力し度き旨の申出ありしにつき

感謝を表しつつ、本日より工事分
担を割充つ。電報にて上申せる工

事認許し来る。午後水泳をなす。
六月二十四日(木)晴、クエゼ

リン神社前道路拡張工事縄張を為
し工事に着手す。

愛国丸エビを多数捕獲し来る。
先任参謀と共に第六艦隊司令官

官宿舎予定地その他を巡視す。日
本連合艦隊(軍艦武蔵)に行幸あ

り御言葉賜はりし由電報あり。
午前七時五十分我哨戒中(コ

ウ、四、チ。ネ地点略符)の飛
行機、漂流中の浮舟を発見し敵大

型機の不時着塔乗員なりしを知ら

ず銃撃し三名死亡せしむ。(第二
十二航空戦隊報告)。橋本中尉に
ルオット分遣隊長を命ず(司令官

の認許を得て)

南拓会社参事村原彪一氏及び社
員三人大作氏を夕食に招待す。

六月二十五日(金)晴、朝第
四砲台北方新道路工事を視察す。

同砲台の弾薬庫縄張りをなす。豚
小室竣工し四ヶ月に亘る仔豚六疋を

入る。一日で月に慣れ可憐愛すべ
し。午後第三指揮所の位置を決定

す。夜電あり。本日午前三時ガダ
ルカナルの敵活発となる。南洋方

面艦隊迎撃の姿勢を執り警戒を
要すと。依つて砲台、見張、電探

第三配備となす。

六月二十六日(土)晴、新築長
官々舎を見る。また新築兵舎の建

築掛員と共に立合い縄張を行う。
化学戦に対する防衛準備をなす必

要ありとの命あり。一昨二十四日
行幸の際連合艦隊に賜はりたる御

言葉伝達せらる。

『連合艦隊司令官以下一同が
開戦以来、善謀勇戦、大ニ戦果

ヲ挙げツアルハ努力満足ニ思
フ。今後共一層奮勵努力ヲ戦争

目的ヲ達成セシムコトヲ望ム』と
ソロモン方面20・21・23及び25日

来襲せる敵飛行機二〇九機、その
内27機を撃墜せりととの報告あり。

六月二十七日(日)晴、先任参
謀来訪。明日防疫委員会(蚊蠅捕

獲委員会と改名)開催のことを告
げらる。軍医長を主任とする。ルオ

ット分遣隊長として派遣す。橋本
中尉・同砲台長に任命せる井上兵

曹長並に副長を夕食に招待し特に
重要な任意たることを告げ激励

し且つ欲談す。(つづく)

クエゼリンにおける

日本戦歿戦士慰霊祭の報告

クエゼリン実験地域警備隊

オグデン陸軍中佐

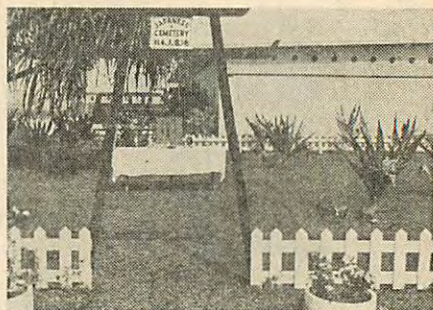


写真 ⑧

御返事大変に遅れ申訳ありません。実は当地の慰霊祭の報告だけでなく慰霊碑建立の場所の回答も一緒に致したかった為です。御寛容の程お願いします。当地に建碑の承諾は、当地の司令官だけでは為し得ず、本国の上級司令部に伺いをたてる必要があります。只今照会中です。従って今回は先日行った慰霊祭の御報告だけしかできませんことをお許し下さい。

祭典は九月三十日(金)の午後



写真 ②

三時にはじめ、十月二日(日)の午後七時まで施行しました。素晴らしくよい天気でした。数名の日系の人を加え、本島在住の多数の人々が敬虔な礼拝を捧げました。私達は全然日本の習慣を知りませんのでマイロン中田氏の御協力を願いました。同氏は当地の建設工事に従事の日系の方で、今なお日本に立派な親類をおもちの方です。この方の監督のもとにお供物を供え、三日に亘る祭典の幕が開かれました。

同封の新聞は本島発行の「アワー」グラス紙の9月24日号と10月1日号です。(浮田記・9月29日号)には「日本殉国戦士の慰霊祭」という見出しで「マーシャル・ギルバート方面で戦死の日

祭典が明9月30日午後から施行され、10月2日の夕刻まで日本人墓地で行われる。この祭典はマーシャル・ギルバート方面遺族会の御希望を、浮田信家氏の斡旋によりクエゼリン実験地域警備隊が執行するものである。同遺族会は三万余の戦死者の遺族で構成されている。祭典は戦死者に対し日本で通常行われている方式に従う。祭壇は白布をもって覆われ、その上に英霊の位牌を中心に日本の草花・菓子・日本酒・ウキスキー・煙草・茶・お香等数々の懐かしい故郷の品が供えられている。なお式典の三日間線香がともされ、芳香が漂いつづける。従ってアメリカ式の方式は行はない。午後



写真 ③

三時には本島の幹部大部分参集し、敬虔な礼拝を行う。皆さんの参拝の御案内をするとあり、10月1日号には⑥と⑦の写真のせ「上図はこの祭典の日曜の夕刻まで。下図は英霊の位牌を中心に、両側は日本の草花・日本酒・ウキスキー・煙草・お香など」と記されてあります。(位牌は浮田幹事が書きました)又祭典の様子を御覧いただくため写真(①-⑧)を同封しました。

①司令官ヒラーと私と中田氏。あなたがバシフィックアイランド1号の船長に托された荷物を解いているところ。

②司令官(左端)と私(中央)の前でチャネー陸軍少佐がお茶の用意(浮田註・ある会員の方がこれで南洋で眠った英霊が二十余年振りにお茶が飲めたことだけで嬉しかったでしよう)と涙を拭われました。未亡人の方でした。

③浮田さんの書かれた配置図と首つぎで祭壇準備中。

④中田氏の指図で、供えおわった御供物。

(浮田註・日本酒もウキスキーも二本づつ。煙草も菓子も相当量送りました。①②③の写真参照。私の絵がまづかつたのと、どれも簡単に一つづつ書きましたので清楚を好む日本人はこれがいよいよだとも思ったのでしようか、絵の通り正直に一つづつ供えたことは微笑とともに感謝を覚えます)

⑤墓地入口より祭壇をのぞむ。

⑥準備完了の墓地全景。(浮田註・オグデン氏からは説

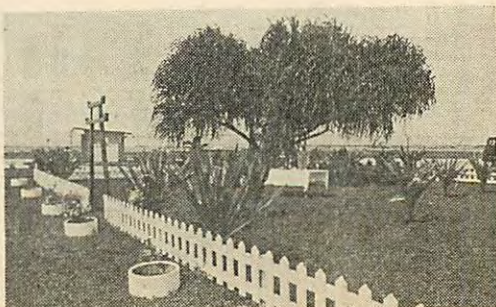


写真 ⑥

明はありませんが周囲の白い柵は最近新しくしたようです。一昨年ウイリアム氏から送られた写真と較べわかりました。又柵の外側に直径一米位の円形の花壇が新設されました。雑草の跋扈から護るためでしょう。日本の草花が咲き乱れております)

⑦祭壇(美しいカラー写真)。(浮田註・決して豪華な盛花ではありませんが、この三月に本会から送った種子から育てたものばかりです。ダリア・撫子・百日草など鮮かな色合です。)

⑧墓地の入口から(カラー写真)。(浮田註・⑤と同じ構図ですがカラーなので鳥居の朱が鮮かです。綺麗な日本の花とアメリカの浜ゆりが咲き競っていました)祭典の様様はお判りいただきましたと思います。皆様の御期待に添い得(五氏五段へ続く)

全国戦歿者追悼式に

参列して

本会は本年この追悼式への御案内を二百家族分いただきました。

本部で近郊の会員に参列の望否を照会し、御希望の二百名の会員には直接総理大臣からの御招待状がとどきました。当日の状況は既にテレビ、ラジオ、新聞に報道されましたので、ここに再び記載いたしません、左の方々から切々たる御感想をいただきましたので御



増山美代子様 山本エツ子様

全国戦歿者追悼式に参列して

父 川生 馨

当日は小雨がパラつきました。これは今日の戦歿御霊の嬉し涙か感激の涙か、また天の慈愛の雫かと、真に意義ある有難き小雨と感ぜられました。

役員各位のお骨折、いろいろ御準備等の御苦労そうした蔭の御努力が当日の裏りであると感じました。相変らぬ、御懇情に

紹介いたします。全文をのせる紙面がありませんので、皆様ものを包括した川生馨様のものを掲載させていただきます。

御感想を寄せられた方(五十音順)

- 江間イクトヨ様 川生 馨様
- 栗原 利雄様 小島 章様
- 西森サツキ様 増山 キミ様

黙とう——この尊い行事——この大きな動き、並に遺族代表の鈴木弘子さんの追悼の辞「おとうさん

おかあさん……」の呼びかけより「私たちをお導き下さい、そして心安らかに御眠り下さい」の一きわ痛切のお声に、白いハンカチのそこかしこの静かなこの微動は真に感無量でした。

三百十万人の戦歿の御霊はそれぞれの立場において尊い生を捧げ、国の礎と成られたのですが、愚息もクエゼリン島での玉砕の一塊をここに加えて戴いたのです。当日その目前の御霊より「平常は義を以って身を守り、いざ非常時は身のゆくべき光ある大道よ」と恐ろに心に強く深く教えられました。

追悼式に参列して

(東京都) 妻 荒井 福栄

追悼の玉座は白く黙禱に靖国社の蟬しぐれ止む

感涙を胸にたたみて帰途の庭小雨にぬれて青葉眼にしむ

悲しみを新たに詣る靖国の

杜にひねもす蟬しぐれ降る

(東京都) 高橋精喜智

拝啓 この節は御面倒相掛け誠に申訳ありません。就きまして

は、九日内閣総理大臣佐藤栄作様より案内状が参りました。来る八月十五日参列いたします。宜しく願ひします。

昭和四十二年春の京都での慰霊祭延期について

環礁4号でこの計画をお知らせいたしましたところ、参加御希望多く予想の三百名を上回るお申込を受けました。ところが別項のとおり現地派遣のことが進捗し、常任幹事が、二月下旬から七月中旬まで留守しますと、折角行方なら、現地の報告を兼ねて行方方がよいといこうとなり、春の施行は後日にのぼすことに致されました。後日と申しても場所は京都がよろしいと思ひますので、地元会員の御意見、また他の地方の方々の時期その他に対する御意見を頂戴できますと幸せでございます。

改版の戦記の刊行延期について

初版戦記の品切れと、本会の地域拡大に伴う改版を必要とし、十二月完成の予定で既に御注文を多数承りまた代価までお送りの方が沢山ございます。

ところが別項にてお知らせいたしましたとおり、現地派遣のことがありますので、この際現地の視察報告を追記した方がよいということとなり、延期のことに致されました。お待兼ねの方が多数と存じますが、右事情御賢察の上御寛容下さいますようお願いいたします。

既に御申込の方の御氏名、お預り金等控えてありますので、その方には出来上りましたときお送りいたします。

(四頁五段よりの続き)

ましたでしようか。御満足いただけたら幸せです。日本のしきたりを知りませんが、最も心をこめ、おごそかに行いました。祭典後お供物は式場作りを手伝った人々に御願ひしました。又貴会から特に私共にお心をこめお贈り下さったサントリー、ウイスキーありがとうございました。厚く御礼申し上げます。

さて貴会の御希望に對してもっと大切な建碑のことです。私としては今から三十日から六十日の間に御返事を差上げられればよいがと願ひしています。何しろ米本土は、ここから七五〇〇哩も離れておりそこで決めることですから、この遠方での事務的処理には相当日時を要すること、おわかりいただけると思ひます。

(浮田註・お役所仕事はどこでも時間をとられるものでしょうか。七五〇〇哩といつても現今は近い距離、又一、二ヶ月というのを三十日とか六十日とか大げさな数を使ったのはオグデン氏のニューモアーと思ひます。慰霊祭が思うようにすみ、本会にも喜んでもらえるというホッとされた気軽さからだと思ひます) 終りにのぞみヒュー大佐と私自身から、貴会々員の御多幸をお祈しております旨お伝え下さいますようお願いいたします。

慰靈碑建立と

現地派遣について

第一 慰靈碑建立

このことは殆んど毎号の環礁で申して来ました。初めは船便の有無も、従って輸送可能な荷物の大きさも不明のため、材料を小刻みに送って、現地の手で製作を願う考でした。ところが去る九月十七日オグデン中佐から次の内容の手紙がまいりました。

(イ) このような立派な碑の製作には石工は勿論、特殊技能をもった技術者が必要ですが、本島は現在増設工事にも手不足の状況でとてもお受けする余裕はないと思います。

(ロ) 日本人墓地は巨大なレーダー装置に囲まれ、次々に重要施設が増設されるので外国人の入ることは強く制限されています。切角の慰靈碑ですから同じマーシャル諸島中誰でも行けるマジユロに建立されては如何ですか。当司令部から非公式に意向打診のところ歓迎の旨内諾を得ております。

本会では早速数回に亘って協議しましたが、結局環礁四号で既にお会員の御同意を得ている原案におつきました。

一方五月に現地の霊砂を受領してから、マーシャル方面へ往復便をもつ汽船会社がおかり、同社の御親切な斡旋で、船が横浜に入港

する毎に本部役員が訪問して船長からいろいろ話を聞いています。30トンまでの荷物なら輸送できることも判りました。そこで十月はじめ、折返しオグデン中佐に、

一、碑は日本で完成し、本会々長から貴司令官に贈呈する。
二、碑は参拜の能否よりも、英霊が永へに眠る聖所である。
従って最も多数の戦死者の血を流したクエゼリン島にした

い。
三、デザインその他貴方で好ましくない点があるなら御迷惑だらうから如何様にも改めるので忌憚なく知らせて戴きたい。

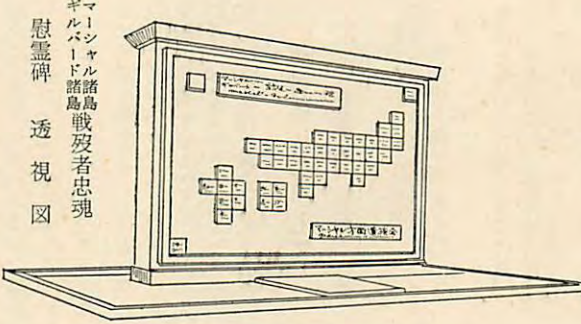
と申し入れました。三頁のオグデン中佐の報告の中に、その返事が含まれております。

全貌を先方に知らせた碑というのは環礁4号12頁で既にお知らせしたとおりであります。内海さんの御懇意の彫刻家であり又庭園芸術家の鷹本初太郎氏が設計されました。本頁の図の通りのもので

す。地上三・七四米、幅四・四七米、裏に霊壘の奉安庫をつくります。この製作は明東建設にお願ひする予定しております。同社は明治神社と東郷神社の造営に寄与するところの大きい会社で社長は増田正信氏、本社は渋谷区原宿、東郷神社の近くにありませう。オグデン中佐の報告にあった慰

靈碑建立について、米国から承認がありましたら、東郷神社境内で起工式を行い、製作は同境内でたします。起工式は一応一月上旬を考えております。参列して下さい。方及び工事の様子を御覧下さる方には、この計画がきまり次第詳細をお知らせいたしますので予め本部あて御申出下さいます。

一方製作決定と同時に、会長か



マーシャル諸島 戦歿者忠魂
慰靈碑 透視図

ら各都道府県知事あて、建碑のため県産の石(20センチ角で厚さ3センチ)に知事の執筆による県名を彫んだもの一個宛寄附方お願いする予定にしております。土地の会員が県庁に御口添えしていただく効果的と思えます。この交渉をして下さる方には会長から県に送る申請書の写をお届けいたします

すので、本部あて至急お申出下さい。
第二 現地派遣、収骨・慰靈

環礁4号13頁でこの計画をお知らせしましたとおりですが長期間要するのと船旅というので御申出がありませぬ。結局本部からこの目的のため浮田常任幹事と佐竹幹事に御苦勞を願うことになりました。予定は次の通りです。

- 一、二月二十七日パシフィックアイルランド号(四二二八トン)で横浜から出発。
- 二、三月中旬(普通二十四日かかります。)マジユロ着
- 三、約三ヶ月滞在。この間にマーシャル諸島中ウオッセ・マロエラップ・ヤルト・ミリ、ギルバード諸島中タラワ・マキン及びナウル・オーシャンの各島を廻ります。
- 四、七月中旬帰着予定。

第三 経費について
所要経費

- 一、建碑関係
 - (一) 製作費 七〇〇、〇〇〇
 - (二) 謝礼(設計起工式等) 一〇〇、〇〇〇
 - (三) 梱包費 二四三、〇〇〇
 - (四) 輸送費(陸上) 二二四、〇〇〇
 - (五) 〃 (海上) 四〇〇、〇〇〇
 - (六) 維持費(クエゼリンへ委託費) 二〇〇、〇〇〇
- 計 一、八六七、〇〇〇
- 二、現地派遣費
 - (一) 日本マジユロ往復船賃 四五〇、〇〇〇

(二) マジユロギルバード往復 一、五〇〇、〇〇〇
(三) マーシャル内交通費 一〇〇、〇〇〇
(四) 滞在費(一泊十ドル) 八五〇、〇〇〇

(五) 調査費 二〇〇、〇〇〇
計 三、一〇〇、〇〇〇
総計 四、九六七、〇〇〇

本部は引続き厚生省或は国会に国費の補助を懇請しておりますが未だお聞届け得られません。やむなく次の通り計画しました。

一、出身県からの寄附、沖縄の例(各県毎に八十万乃至八百万円の碑を立てられました)もあり、前記の石と共に十万円程度の御寄附を御願ひしたいこと。

○会員からもある程度の分担をお願いしたいのですが、遺族という特質上心にも事欠く御老人や未亡人が多数おられます。まだ霊壘を御送付ない方も多数お

りですが、いくらか送金しなくてはなるまいとの御心配から送れずにいるということも聞いております。そこで一口を百円とし何口でも任意に御送金願うことにいたしたいと思います。

前記のとおり相当額を要しますので、願えることなら一〇口以上にして下されば幸せです。お差支えの方は幾口でも結構でありますことは前記の通りです。全く御送金なくても霊壘だけはお送り下さい。戦死された方がお淋しいと思ひます。

御送金下さる方のため振替用紙を同封いたしますので御利用下さい。

II 遺作 II

「随分大きな島」(3)

— 兵曹長衛藤二六殿日記 —

昭和十六年

十月二十七日 午前十時出帆、

ポナベはトラックと違い、良い印象を与えてくれた島だった。それだけに待ちわびた出発の日ではあったが聊か名残惜しい感情が湧いてくる。一生の内再び来る事の出来ない所かも知れない。船はアルゼンチナ丸だったので、室は綺麗だし、船体が大きいいいか、揺れもしないでとても満点の航海だ。食事のとき食堂にゆくだけで、一日中室の中で第六通信隊に行く六名と賑わす。楽しい航海だ。

十月二十八日 朝案外早く目がさめる。昼の疲れが出たのか。ポナベの夢も見ずにぐっすり寝こんでいた。一日中なごな航海。本船も水が不足とみえて、のどのうるほしようがないのには幾分苦勞した。夕食後は食堂でレコードなど聞いて遊ぶ。最後の夜なんで誰も聊か名残が惜しいとみえて床につくものがない、月は美しいし、とってもいい夜だった。

十月二十九日 午前七時入港。五時頃からジャポール島から連なる島々の姿が本船の左舷にはっきり見え初めた。人に聴いた通り全島が珊瑚礁らしくて海拔一米か二米位のようなだが、椰子の木は島々からあふれ出る程繁茂している。船はイメージという島に着け

られた。ここからクエゼリンまで一昼夜かかるそうだ。当分の間この島にご厄介になることになった。やはり自分の同所轄だけあってなんとなく感じがよい。午後は納兵曹と近くをさまよって見たが、島の一方から他の端まで五分間もかからなかった。

十月三十一日 幾分頭痛など催した事もあったけど、旅行中別大した病にも罹らなくて幸せだった。だが初日から最後の日まで少しも落付かない生活で過してしまつた。流浪に似た旅で過してしまつたからだ。まずトラック島から

ポナベ島へ、それからイメージ島へ。僅か二つ三つの島を渡るのに一カ月も費すのだからやりきれない。幾分任地に近づいてはいるが、それでも任地に落付けるのはいつの事やら。然し自分の一生にこんなに変化の多い月のあつた事をしるせたのも却って幸福かも知れない。

十一月一日 来る三日には競技があるの、バレルのポールを借りかたがた、納兵曹と二人でエニポール島まで弁当持参で出かける。緑の椰子に包まれた小島があまりに多いので、さながら瀬戸内海でも遊覧しているような感じがする。全くきれいな海だ。仮棧橋を離れて約十分ほどして、千米の対岸のエニポール島につく。支庁

のあるジャポールの町はこの島である。ひっそりとした島だ。棧橋近くに島民の家が三、四軒あるだけで外には何も無いらしい。〇〇を訪問したら偶然大平兵曹に出会つた。全く奇蹟と思えた。学校で別れてからずいっとこの方面にいるとのこと。肝心のポールはなかつたが、午後一時頃まで棧橋付近で魚釣などして別れた。大平兄も物資の不足には聊か降伏しているらしい。一日一日減っていくからやりきれないなんてこぼしていった。気候のせいか随分やせてるように見えたが、どうして仲々元気が

だ。満場時代二人で由ノ木あたりをさまよつた事など語り合つて大いに過去の思い出に花を咲かす。帰つてみると明日出発などと皆が準備をしたが八日に延期された。なんて説もあるらしい。実際のところいつの事かわからない。

十一月三日 明治節、南方遙かなる洋上の一孤島より明治大帝の御遺徳を偲び奉ると共に、忠良なる兵士たらんことを誓ひ奉る。この日天気極めて晴朗なり、昨日も今日も慰問袋が届いたらしい。隊員大いに張り切るの場面がここに展開されていた。幾月か幾年か人気少ない隔地にいる勇士には慰問袋が何よりも慰めになつてくれるのだらう。隊では分隊対抗の競技大会が催されていた。

十一月五日 イメージ島で暮すこと今日で一週余。自分の住所でないといくらのおんびりはできて退屈なものだ。どんな船でもいいから便船がほしい。南に下るにつれて雨が少なくなると聞かされていたが実際少

い。この頃は全然雨がないうつていい状況。自分等は室内で少し位の汗を流すのみで過せるが、外で労働している人々は全くやりきれないだらう。窮すれば通ずるとか嫌でならなかつた海水風呂も、この頃はなくてはならなかつたに感ぜられるようになってきた。風呂場掃りに眺める月の姿は何ともいえないほど美しい。

十一月六日 今日是不思議に昼間スコールに見舞われる。イメージ島に着いて初めてだ。然し一時間とは続かなかつた。降り止んだ後の地面は少しもしめつていなかつた。それでも幾分涼しさを誘つたとみえて、いつも暑苦しくて寝れない昼寝なのに、今はほんとにいい気持でぐっすり寝られた。午後はいろいろに別れて運動があるんだが、自分は水泳の方に参加してみた。内地の夏以上に海水も温かい。水はすきとおつているし波にいい水持だった。故郷の人々小生が今頃、水泳なんかしているなんて想像もしてないだらうに。主計科の某氏の説によると十日頃入港の船で、十一日頃クエゼリン島に向うとのことだ。

十一月十一日 十一日柏丸便乗とかいっていた噂も船が入港しないんじや話にならない。全くがっかりさせられる。佐世保を九月十七日に出港してから、まる二カ月がすぎなんだ。

この頃は昼でも時々スコールが訪れるので暑いナーとこぼすこともない。十一月十五日 今朝入港した船が十七日に出港とかで愈々明朝は最後の航路につく船に乗むこと

となつた。こんどこそはたどりつけるだらう。十一月十六日 いよいよイメージ島ともお訣れた。午前十時碇泊中の白金丸に乗船した。十一月十七日 午後三時ジャポール出港。居住性のもつても悪い船なのに悩む。

十一月十八日 エルヂェー島に入港。トタン屋根の家が少しあるだけ。誠にひっそりした島。勤務する人々の苦勞を察する。十一月十九日 エルヂェー出港。いよいよクエゼリンに向う。十一月二十日 午前十一時クエゼリン入港。随分大きな島なのでほつとする。上陸第一歩の印象も何となくよかつた。随分大きな島なのに民家が軒もないのには聊かびっくりした。

その上この頃は酒保も品切れでやつとおわたりの飯に腹をみたしているという有様。しかし時節柄却って緊張した気分をもち続けることが出来るかもしれない。夜はゆつくり風呂を浴び幾日ぶりに垢を落した。内地を出てから六十五日目である。防備隊で行われている演芸会をみにゆく。余興に本島人の踊りもあつた。何れも素人と思えない程上手なことに驚いた。大きな島に落ちてくことのできた喜びと明日からの活躍を心に誓つてベットについてた。

(終) 編者記 小さいと思つたのが予想に反し又着任早々演芸会にぶつかった衛藤兵曹長は、はりきつてもちばにつきました。機会を得ましたらつづけて掲載します。

会 員 だ よ り

(東京都) 母 西森フジエ
 今年の終戦記念日には、ご招待を受けまして有難く、二十一年祭に列席し、感きおまる思いでした。

式場である武道館に私の入るところがテレビにうつったそうで、あちこちから、電話や手紙で、久しぶりに元気な姿を見て安心しましたと、娘達からの喜んだ便りをつけて、これも皆様のお蔭また息子のお蔭と胸が熱くなりました。

(秋田県) 妻 奥山 キノ
 本当に皆様の集い(旧クエゼリン方面戦死者遺族会のこと)が羨ましく感じました。私達ギルバート諸島の遺族はいつになつたらこの様な機会に恵まれる事やら。一日も早くこのような集りが出来、お互い力を合せ強く生きる事を誓い合つたり慰め合つたりして、英霊を慰め合いたいものと念願いたしておりました。

(広島県) 妻 吉高 ユキ
 同封の軍事郵便預金額、僅少ではございますが主人生前に残してお金です。現今でこそ僅少年ら、当時(昭和十八・九年頃)は多額だった筈です。その点宜敷く御諒

承の上、故人の誠意を諒として下さい。本当に少ない金高で送金する事も考えられましたけど。

(広島市) 父 浜本 米一

環礁におしえを受けて老の身にむち打ながら御霊まもらん

靖国に鎮まる御霊も老の身に幸多かれと祈り居らん

環礁を通読し
 マーシャル方面遺族会に寄す
 斎藤 周助

唯一一誠無一私
 大乗心事只天知
 南瀛漸見視塵斂
 欲建慰靈彰顯碑

(群馬県) 父 後藤 賢
 私は貴遺族会に加入致して居らないのにその都度書類をお送り下され、有難く厚く御礼申上げます。私が馬鹿者の為ある人にそのかかれて今まで加入致しませんでしたが、漸く目が醒めました。お恥かしい事です。就ては英霊の戒名と寄附金を同封致しました。貴会に加入させて頂き下さい。お願い致します。

左は昭和四十一年靖国神社の献詠、題「煙」に本会々員三重県道側邸矩様が応ぜられ、次点歌として「靖国」七月号で発表されたものです。短冊に認め、本会に送られましたものを掲載いたしました。

(本部より。そんなことがあつてはならないのですが、我國では遺族の切実な希望を利用して、慰霊祭を行うとか碑を建てるとか、墓参団を派遣するなど言葉巧みに報道機関や旅行社や或は政治関係の方々までが儲けや宣伝、売名を企んでいると聞きます。本会が同じ眼でみられるのも、皆様が悪いのだとなく、今の世間が悪いのだと思ひます。本会は創立以来会長はじめ会員の皆様とも慰霊一途に清らかに過しておりますことを嬉しく有難く思ひます。)

(福島県) 兄 三木沼与三
 南海の孤島に散りし二十年
 醜草の塚 虫のなくらん
 今回環礁をお送りいただき、遺族会も結成されて、慰霊祭を行われ現地にお墓も建てられる計画をも知りまして、まことに嬉しく、日本の勝利を信じて瘴癘の地に骨を埋め誰一人訪り人もなくねむる英霊もどんなにか喜んでおられることと存じます。

(本部) 編集 人
 左は昭和四十一年靖国神社の献詠、題「煙」に本会々員三重県道側邸矩様が応ぜられ、次点歌として「靖国」七月号で発表されたものです。短冊に認め、本会に送られましたものを掲載いたしました。

会 計 中 間 報 告

常任幹事 佐 藤 宗 不

昭和四十一年十一月末日現在の会計現況を御報告いたします。

本会の最大の仕事である遺骨収集、現地慰霊碑建立の実施も間近に迫り、資金面を案じておりまして、全国の会員から続々と浄財が寄せられ、前途に明るさを覚えます。特にありがたいと思ひますのは、遺族でない方々が本会のことを伝え聞いて御寄進下さることであります。

午前、午後二回届けられる郵便物の一つ一つに、皆様の真心溢れる御手紙を拝読し、益々自信を深めることができました。と申しましても肝心の経費所要量は、現地も状況がよくわからない為、「これだけあれば足りない」という計算をたて難いのが実情でありまして、万一資金不足の為派遣者に御苦勞をかけたたり、中途で遺骨収集をやめるようなことになっては申しません。

1 収入	563,379
40年度より繰越	2,272,891
収入	26,988
収入計	2,863,258
2 支出	83,030
慰霊祭費	16,655
調査費	167,015
刊行費	291,210
運送費	251,963
通信費	10,800
印刷費	254,316
用品	101,065
事務費	5,495
振替	667
支出計	1,236,573
3 現金・預金	7,890
貯蓄	18,795
普通	500,000
通知	1,100,000
定期	1,100,000
現金・預金計	1,626,685

遺骨収集献詠

煙乃白い夫や二十一年
 クエゼリン島 雲砂帰りの足根

寄附者芳名

(一、三三三)

今回も多数の遺族でない方々や篤志会員及び会員から寄附、抛金を頂きまされたことを、金額御芳名を記載し御報告致します。又戦死された方々の生前の軍事郵便貯金の御寄附が多数ございました。これこそおそろそかに使用できませんので役員一同検討の結果慰霊碑内に納める霊壘奉安箱、(永久に不鏽の特殊鋼製)製作費に充当させて頂いたことになりました。

相変らずの会員多数の任意又随時の温い浄財に対し深く感謝いたします。有意義に活用いたしますことをお誓いします。

寄附額 芳名 (敬称略)

(パーレン数字は寄附回数)

篤志会員その他

五〇〇〇 戦友 嘉村 栄(1)
 〃 〃 〃 〃 (2)
 〃 〃 〃 〃
 〃 〃 〃 〃

三〇〇〇 戦友 本木 光江(1)
 一〇〇〇 嘉村 栄(3)
 〇〇〇 元海軍潜水学校長
 〇〇〇 浮田 秀彦(1)
 〇〇〇 有志 岡村 洋子(1)
 〇〇〇 戦友 大矢野 弘(1)
 〇〇〇 元厚生事務官 斎藤 周助(1)

赤い羽根共同募金会関東
 ブロック事務局長御一同

北海道

一〇〇〇〇 父 大井誠三郎(3)
 六〇〇〇 父 西村 英雄(1)
 五〇〇〇 父 沼山長一郎(4)
 三〇〇〇 兄 黒沢 正己(1)
 〇〇〇 妻 穂刈 モト(2)
 〇〇〇 父 石川金五郎(1)
 〇〇〇 父 長島 村蔵(1)
 〇〇〇 父 柴田 友吉(1)
 〇〇〇 父 千場鉄五郎(2)
 〇〇〇 母 野戸 タカ(1)

二〇〇〇 母 土田 セツ(1)
 一八〇〇 母 金子 きよ(1)
 一五〇〇 母 伊藤 フジ(1)
 一四〇〇 父 阿部 栄(1)
 一〇〇〇 兄 佐藤 武男(1)
 〇〇〇 母 白石 ト政吉(1)
 〇〇〇 母 山本 政吉(1)
 〇〇〇 母 城田 ナカ(1)
 〇〇〇 母 太田 恒サキ(1)
 〇〇〇 母 亀谷 勝江(3)
 〇〇〇 母 木川田 ミヨ(2)
 〇〇〇 母 松谷 テイ(2)
 〇〇〇 母 鈴木 とみ(1)
 〇〇〇 母 本間 ハツ子(2)
 〇〇〇 兄 宮前ハツ吉(1)
 〇〇〇 父 馬渡与三吉(1)
 〇〇〇 父 山内吉太郎(1)
 〇〇〇 父 花田 経宣(1)
 〇〇〇 父 阿蘇 村蔵(1)
 〇〇〇 父 田村 ヨシ(1)
 〇〇〇 父 斎藤建太郎(1)
 〇〇〇 妻 安達智恵子(2)
 〇〇〇 父 高橋 初助(4)
 〇〇〇 姉 小林 正未(1)
 〇〇〇 母 富永 マツ(1)
 〇〇〇 母 斎藤 とく(1)
 〇〇〇 兄 坂野 猶蔵(1)

青森県

五〇〇 兄 重岡 幸雄(1)
 三〇〇 父 斎藤 周治(1)
 二〇〇 母 一戸 サト(1)
 一六〇 母 新見タマノ(1)
 一〇〇 父 伊勢 丹治(1)
 〇〇 母 北野 進(1)
 〇〇 母 木川田 ミヨ(2)
 〇〇 父 三上 リヨ(1)
 一五〇 父 阿保佐五郎(1)
 〇〇 妻 須藤 清作(1)
 〇〇 長男 渡辺 よし(3)
 〇〇 父 坂本 要治(1)
 〇〇 父 中村善五郎(2)
 〇〇 父 荒谷美之丞(1)
 〇〇 父 池田 勘茂(1)
 〇〇 母 田中 ロケ(3)
 〇〇 母 蛭田 タケ(1)
 〇〇 母 小笠原タナ(1)
 〇〇 母 洪木 フミ(1)
 〇〇 母 葛西 タマ(1)
 〇〇 母 田村 かし(1)
 〇〇 妻 小笠原ヤチヨ(2)
 〇〇 妻 田中 せつ(1)
 〇〇 妻 尾崎 キエ(1)
 〇〇 妻 中村 繁宏(3)
 〇〇 弟 相馬 友則(1)
 〇〇 二男 工藤 福蔵(2)
 〇〇 叔父 佐々木周造(3)
 〇〇 兄 中村 操(1)
 〇〇 兄 橋館 安弘(1)
 〇〇 兄 中村 丑之助(1)
 〇〇 父 伊東 萬吉(1)
 〇〇 妻 本堂 テフ(3)
 〇〇 妻 成田 仁八(1)
 〇〇 父 白山 八八(1)
 〇〇 母 天坂 つや(1)
 〇〇 母 石田 少一(1)
 〇〇 母 工藤 タマ(1)
 〇〇 母 熊沢 カツ(1)

岩手県

三〇〇 兄 長尾 かし(1)
 〇〇 父 小倉運次郎(1)
 〇〇 父 田中孝太郎(1)
 〇〇 妻 宮越 勝弘(1)
 〇〇 妻 塚原 ハナ(1)
 〇〇 父 千田徳兵衛(5)
 〇〇 母 千葉 栄(2)
 〇〇 兄 小杉 リサ(2)
 〇〇 父 佐々木利蔵(1)
 〇〇 父 佐々木利蔵(1)
 〇〇 妻 坂本 要治(1)
 〇〇 妻 星川 クマ(2)
 〇〇 妻 宮田 マル(1)
 〇〇 妻 橋本 ミヨ(1)
 〇〇 妻 佐藤 春治(1)
 〇〇 父 佐々木十一(3)
 〇〇 父 佐藤 宣人(2)
 〇〇 父 鈴木伊久太郎(1)
 〇〇 父 菊地 宣人(2)
 〇〇 父 八重畑 長助(1)
 〇〇 母 佐藤むめ(1)
 〇〇 母 皆川 ふみ(1)
 〇〇 母 藤原 ナカ(1)
 〇〇 母 金戸 正志(1)
 〇〇 母 辻山 シカ(2)
 〇〇 妻 小林金次郎(1)
 〇〇 妻 佐々木みじ(1)
 〇〇 妻 小原ハルノ(1)
 〇〇 妻 佐藤キン子(1)
 〇〇 妻 菅原 征子(1)
 〇〇 妻 阿部 俊夫(1)
 〇〇 妻 西 みな子(1)
 〇〇 妻 桜井喜四郎(2)
 〇〇 父 菊地 宣人(2)
 〇〇 父 鈴木三代治(2)
 〇〇 妻 松木 孝子(2)
 〇〇 妻 菊地 治郎(2)
 〇〇 父 松木 孝子(2)
 〇〇 妻 高橋虎三郎(1)
 〇〇 母 佐藤たけよ(1)
 〇〇 父 鈴木長太郎(3)

秋田県

一〇〇〇 妻 高橋とし子(2)
 〇〇 妻 平形いせこ(4)
 〇〇 父 師岡 義秀(1)
 〇〇 兄 牛坂 貞雄(1)
 〇〇 父 小野寺定石(1)
 〇〇 母 山下 モン(2)
 〇〇 父 丸子 清衛(1)
 〇〇 妻 主藤はつみ(1)
 〇〇 父 木血卯平治(1)
 〇〇 妻 山内とらよ(1)
 〇〇 母 大黒きよ(1)
 〇〇 兄 植木栄三郎(1)
 〇〇 甥 大内 衛(1)
 〇〇 母 若菱とも子(2)
 〇〇 父 佐藤 新蔵(3)
 〇〇 母 熊谷サダコ(3)
 〇〇 妻 奥山 倉蔵(2)
 〇〇 妻 杉本 きよ(1)
 〇〇 母 関山 富吉(2)
 〇〇 母 菊地 タメ(1)
 〇〇 母 鈴木タケノ(1)
 〇〇 母 間藤 タネ(1)
 〇〇 妻 佐藤 アキ(1)
 〇〇 妻 渡辺 せつ(1)
 〇〇 妻 佐々木正蔵(2)
 〇〇 父 赤平安之助(1)
 〇〇 父 稲田 作治(1)
 〇〇 兄 成田松一郎(2)
 〇〇 兄 幢崎 新一(1)
 〇〇 弟 田中 米治(1)
 〇〇 妻 相模 静(1)
 〇〇 妻 武田 ユデ(1)
 〇〇 父 佐々木三郎(2)
 〇〇 妻 高橋 リサ(1)
 〇〇 母 伊藤 カネ(1)
 〇〇 弟 渡部 重雄(1)
 〇〇 母 森谷 ミノ(1)

山形県

二五〇〇 〇〇
 二一五〇 〇〇

〇福 〇島 〇県
 一〇〇〇 二〇〇〇 三〇〇〇 三三〇〇 一〇〇〇 二〇〇〇 三〇〇〇 五〇〇〇 七〇〇〇
 父 父 父 父 妻 父 父 母 妻 妻 父 兄 父 母 父 母 父 母 父 妻 妻 妻 父 長男 妻 母 母 妻 妻 父 長男 妻 父 父 父 母 父 母 兄 妻 妻 妻 父
 佐藤喜一(房雄)(1) 佐藤喜一(辰三)(1) 遺藤 定見(1) 吉田 京(1) 吉田 ハル(2) 吉田 肇(2) 野地 トメ(2) 仲江 キミ(1) 池田 満江(1) 角田 直吉(2) 角田 啓一(3) 佐藤 角治(3) 佐藤 角治(1) 小山田 ハル(1) 阿曾 弥与吉(1) 青木 チエ(2) 遠藤 覚栄(1) 遠藤 力之助(1) 皆川 タツ(1) 関根 千代(2) 長男 玉川 啓治(1) 妻 佐藤 千代(1) 母 渡辺(ミ)(周三)(1) 母 木村 よね(1) 妻 本間 折恵(1) 妻 渡辺 ミノ(1) 父 堀米 与之助(1) 長男 丹野 正昭(1) 妻 大内 修一(1) 父 小野 喜市(3) 父 星川 繁蔵(2) 母 沢井 よし(3) 父 斎藤 嘉蔵(1) 母 斎藤 ちらよ(2) 兄 佐々木 善清郎(3) 妻 飯野 ヨス(1) 妻 石井 まつ(3) 妻 村上 よね(1) 父 菅原 常治(1)

〇新 〇潟 〇県
 一〇〇〇 一〇〇〇 一五〇〇 二〇〇〇 二〇〇〇 三〇〇〇 三〇〇〇 四〇〇〇 五〇〇〇 五〇〇〇 五〇〇〇 一〇〇〇
 父 兄 父 母 母 兄 父 父 母 姉 兄 妻 父 母 兄 妹 妻 兄 女 母 弟 母 父 父 妻 兄 父 父 父 母 兄 妻 父 父 父 兄 妹 父
 佐藤 亀一郎(1) 小林 与四郎(1) 神田 常太(1) 河崎 シツタマ(1) 葛西 一郎(2) 大山 一郎(2) 遠藤 庄作(1) 石塚 辰寿(2) 伊藤 ヨリ(2) 鮫島 みさを(3) 青木 謹次(3) 阿部 文吾(2) 高橋 梅子(1) 大塚 丈吉(1) 後藤 キヨ(1) 安中 久雄(3) 阿部 エイ子(3) 藤田 より(4) 小針 吉秋(1) 酒井 昭子(1) 船山 タツ(1) 堀越 康平(2) 野地 トメ(2) 佐藤 安兵衛(1) 高橋 藤重郎(1) 田中 トメノ(3) 佐久間 一美(1) 菊田 菊次(2) 遠藤 清見(1) 馬場 信吉(1) 坪井 サツヨ(1) 三浦 一郎(1) 吉津 ミドリ(2) 緑川 智一(2) 宗像 要喜(2) 渡辺 卯一(1) 八木 沼与三(1) 曳地 ハルエ(1) 杉本 鉄弥(1)

〇茨 〇城 〇県
 二〇〇〇 三〇〇〇 一〇〇〇 一〇〇〇 一〇〇〇 二〇〇〇 三〇〇〇 三〇〇〇 五〇〇〇 一〇〇〇
 父 父 姉 父 母 姉 弟 弟 兄 妻 母 長男 母 妻 兄 父 妻 父 妻 兄 兄 弟 母 母 兄 兄 父 母 妻 妻 父 妻 父 父 妻 妻 妻 父
 吉川 勝太郎(3) 池田 清二(3) 横田 くま(3) 高橋 辰治郎(1) 土田 タマ(1) 関塚 礼(1) 小船 井了二(1) 間瀬 昭二(1) 福原 元義(1) 原 クニ(1) 黒岩 ヨシ(1) 川田 キク(1) 飯田 鉄之助(1) 山本 チイ(3) 山崎 喜代治(1) 高野 仙吉(4) 相模 ハナ太郎(1) 小川 すみ江(2) 坂井 岩太郎(2) 安藤 弥一郎(2) 安中 久雄(2) 近藤 茂(1) 米田 ナヲ(2) 吉田 キソ(1) 山口 泰二(1) 山岸 政一(2) 丸山 政四(4) 松永 よる(1) 松岡 イキ(1) 野内 キヨ(1) 刀根 松次郎(1) 高林 セキ(2) 田村 平三郎(1) 田村 仙一郎(1) 佐野 庄太郎(1) 小林 松枝(1) 佐藤 つな(1) 佐藤 フジ(2) 佐藤 喜一(1)

〇栃 〇木 〇県
 一〇〇〇 二〇〇〇 二五〇〇 二〇〇〇 二〇〇〇 五〇〇〇 五〇〇〇 一〇〇〇 一〇〇〇 一三〇〇 一五〇〇 二〇〇〇
 兄 兄 兄 母 父 妻 父 父 妹 父 弟 兄 妻 兄 父 父 妻 母 母 父 父 父 女 妻 父 父 兄 兄 母 弟 妻 母 父 兄 父 父 妻 妻 父
 服部 善作(1) 日向 勇(1) 小川 一(1) 田名 網武夫(2) 渡辺 シナ(2) 生井 勘吉(1) 関谷 アサ(1) 早安 栄太郎(2) 菊地 資三(2) 川端 えい(1) 川島 勝(3) 大木 邦助(1) 井上 徳次郎(1) 猪瀬 なか(1) 広瀬 武(1) 神山 専一郎(4) 大山 藤太(1) 辻野 キヨ(2) 高野 ひて(1) 高田 みつ(1) 松本 勝一(1) 飯塚 喜蔵(1) 石崎 政吉(1) 吉田 君枝(2) 矢吹 はま(1) 野口 孝雄(2) 野上 松雄(1) 中尾 彦三郎(1) 島田 源治(1) 柴田 その(1) 大和田 義夫(1) 小田 原いく(3) 海老原 あき(2) 潮田 文平(1) 今橋 潔(1) 小池 真市郎(1) 畑岡 英吉(1) 青柳 泰蔵(1) 中村 潤蔵(3) 若狭 あさ子(4)

〇埼 〇玉 〇県
 一〇〇〇 二〇〇〇 三〇〇〇 四〇〇〇 三〇〇〇 一〇〇〇 二〇〇〇 五〇〇〇 五〇〇〇 二〇〇〇 二〇〇〇 二〇〇〇 五〇〇〇
 父 父 母 長男 母 父 母 甥 兄 父 父 母 妻 姉 兄 妻 子 妻 父 父 母 母 父 父 母 妻 母 妻 父 母 弟 父 母 妻 父 父
 大島 信一郎(1) 大塚 たつ(1) 岡本 宏(2) 岡本 リヨ(2) 遠藤 元一(1) 安藤 直(2) 秋本 文武(1) 海老原 光臣(1) 片桐 友吉(1) 築地 十三郎(1) 田中 はな(1) 幸島 敬資(1) 小林 喜助(3) 新井 のぶ(1) 志村 マツ(5) 長谷川 五子(1) 下城 都衛(1) 高田 ヘル(1) 川中 徳二(1) 川島 セツ子(1) 森 金作(1) 滝沢 謙次郎(1) 須藤 愛子(1) 新後 のぶ(2) 後藤 賢(1) 笠原 善五郎(3) 朝妻 きよ(1) 中野 ちよ(1) 小林 トメ(2) 城田 ミツエ(1) 関部 忠一(1) 竹林 アキ夫(1) 竹山 武夫(1) 近藤 浪次郎(1) 高木 イチ(2) 坂本 テル(1) 小林 源衛(1) 大関 留吉(3)

事務局だより

○田添幹事殿の御辞任

本会役員として献身的の御協力を下さいました田添早苗様は、御家庭の御都合で辞意を表されまし

○本会々則の一部改正について

昭和四十一年度定期総会の決議により本会の会則の一部が左のとおり改正されました。

第一条(名称)この会は、マーン

ナル方面遺族会といいます。戦争中マーン諸島、ギルバート諸島で戦歿した者の遺族を会員として構成します。

第三条(構成)この会は、太平洋

島、マーン諸島、ギルバート諸島及びナウル・オニシャン島関係の方

○重ねて戦歿者等の遺族に対する

特別弔慰金支給法について

載しましたところ多数の会員から大変お喜びいただきました。そのときの一、に戦死者の兄弟であ

○類似団体についてお知らせ

最近新聞、ラジオ等にて南太平洋の遺骨収集とか〇〇島に慰霊

○在庫品について

一、オグデン中佐の報告にのせま

した写真は御希望の方にお頒ち

Table with 2 columns: 種類 (白黒), カビネ版 (三〇〇円), サービス版 (一〇〇円)

送料別

二、新に御入会下さる方の為に環

三、靈壘の用紙もまだ用意してあ

○郵送料の値上げとなりましたの

○領収書はつとめて御送りするつ

○寄附額と寄附者芳名簿

泣き言を申すわけではありません

は至急本部に御申越下さいますよ

御挨拶

環礁を通じ御連絡いたしました

新春を寿ぎ

謹んで新年の

お慶びを申し上げます

昭和四十二年元旦

一応六月中、下旬マジュロ発にて

用の際は本部あて、御書面いた

浮田 信家 佐竹 エス

- 名譽会長 朝香 鳩彦 監事 橋口 昭利
顧問 石橋 湛山 監事 末広 正男
相談役 朝香 孚彦 監事 有馬 成甫
会長 林 茂清 監事 板垣 徹
副会長 加藤普佐次郎 監事 大野 克一
副会長 村上 義一 監事 瀬沼 光久
常任幹事 浮田 信家 監事 土屋 太郎
常任幹事 佐藤 正志 監事 中島 昌彦
常任幹事 秋山 宗正 監事 中田 虎一
幹事 井上 賀雄 監事 成田喜代治
幹事 宇田川ヒサ 監事 長谷川栄次
幹事 木村 久子 監事 長谷川 敏
幹事 国松ふみ江 監事 林 幸市
幹事 小泉 文江 監事 松平 永芳
幹事 佐竹 エス 監事 村岡 達志
幹事 萩原金次郎 監事 安藤 小夜
幹事 山浦 信子 監事 篤志会員
幹事 岡野 正文 監事 篤志会員